

朗読 GEN 第2回定期公演

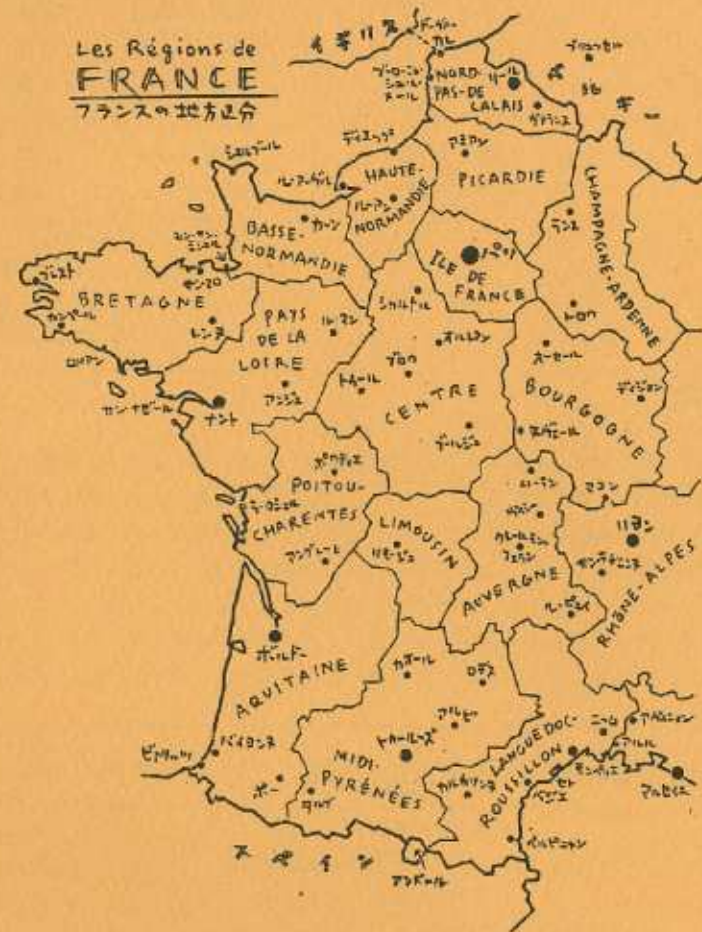
水に流して

～藤田宜永「壁画修復師」より～



2004年7月11日(日) 14:00

シアトリカル應典院



朗読GENでは、一緒に朗読を学ぶ仲間を募集中です。初心者も
初歩から勉強できます。ぜひ、声を出す楽しさをあなたも味わって
下さい。問い合わせ先・・・秋山 (TEL&FAX0742-48-8688)

または、社本 (yumi-sab @ hcc6.bai.ne.jp)

キャスト

アベ・・・田中 章恵
 ブリジット・・・垣内 浩子
 オリヴィエ・・・辻本 由美
 ギュスターブ・・・秋山 多佳
 村長・・・清水 光恵
 語り・・・内川 希子

スタッフ

構成・演出・・・秋山 多佳
 照明・・・前川 智香
 音響・・・長橋 なおみ
 宣伝美術・・・桂 瑞子
 総務・・・太田 淑子
 記録・・・小島 知光

劇中歌「水に流して」

鹿島 充都子

(関西シャンソン界の重鎮出口貴子氏に師事し、大阪を中心に活躍中。)

作者紹介

藤田宜永 (ふじた・よしなが)

1950年、福井生まれ。早稲田大学中退後、渡仏、エールフランス勤務。9年間のフランス生活を経て、フリーに。帰国後、フランス語教師などを経て1986年「野望のラビリンス」で小説デビュー。1995年「鋼鉄の騎士」で日本推理作家協会賞、日本冒険小説協会特別賞受賞。1997年の「樹下の想い」などで、恋愛小説にも新境地を開き、2001年「愛の領分」で直木賞を受賞した。今回取り上げた「水に流して」は作者が恋愛小説に移行してゆく時期に、2年半に渡って書かれた短編5作を収録した「壁画修復師」の中の1編である。

小説に出てくるフランスの地方料理とお酒

アルマニヤック

フランスのブランデーの1つ。アルマニヤック地方の白ワインから作られるブランデー。芳醇な香りと、トロリと舌の上でころがる深い味わいで知られる。



マデイランの赤

小さなワイン産地マデイランの赤ワイン。タナットというぶどうを使って作られる。砂みと濃い色合いを持つ。熟成したものは品質が優れ、高く評価されている。

リ・ド・ボー

リ・ド・ボーは仔牛の喉の部分にある肉塊で、日本語では「仔牛の胸腺肉」と訳される。母乳分解酵素の出るところで、従って成長とともに退化してしまう。肉質が柔らかくトロツとした舌触りである。

カモのサルミ

サルミとは野鳥のガラを細かく砕いてワインで煮込んだ野鳥料理などに使われるソース

のろ羅のシフエ

のろ羅はヨーロッパからアジアに分布。その肉は甘くて美味といわれ、食用とされた。18ヶ月から3年ものがおいしいとされ、肉質が柔らかくセがない。脂肪分が少なくダイエットに理想的だとルネッサンス時代のイタリアで大変珍重されたという。シフエ

は赤ワインを主にして煮込み、最後に血を入れて仕上げる料理の方法。



解説

小説の舞台となるのは、スペインとの国境い、ピレネー山脈に近いポーの町から更に北へ25キロほど入った山間の村である。

うねるように続くブドウ畑に目映い陽ざしが照り注ぎ、石造りの家並みが中世そのままのような村である。この村に滞在する日本人の壁画修復師アベは、依頼された壁画の修復のために教会に通っている。

アベはフランス語で神父を意味し、そのためでもないだろうが、彼が出会った人々は、心の奥に秘めてきた哀しみを彼に委ねるように話してしまう。しかし、それは彼自身もまた、過去の傷を抱えながら、生きてきた人間だからではないだろうか。

作者の藤田宜永は20代の頃、9年間フランスに住んでいる。その際の体験がきっと生きているのだろう。音や色や、匂いを伴って、フランスの小さな村のたたずまいが繊細に描かれている。また、地方独特の美味しそうな料理がでてくるのだが、説明を簡単に記載しているので、鑑賞の一助として下さればと思う。

物語

片田舎の小さなホテルの女主人ブリジットは50歳。従業員のオリヴィエは10歳年下の無口な男である。ひそかに想いをよせていた彼が、こともあろうに喧嘩別れをした娘ロザリーに心を寄せ、結婚したいと思っている。

壁画修復師のアベはこのホテルに宿泊しており、オリヴィエにブリジットへの仲介を頼まれる。何も気づかない男と、彼への愛に苦しむ女と・・・しかし、アベもまた愛に傷ついた暗い過去があった。さて、ブリジットの想いはどうなるのか・・・

フレスコ画とは・・・

主人公のアベは教会の壁画の修復を依頼され、フランスの村々を訪ねてゆく。中世の人々の心が息づくフレスコ画の天使や、聖人に向き合い傷ついた彼の心も癒されてゆくのだ。私たちにはあまり馴染みのないこのフレスコ画とはどういうものか簡単にご説明します。フレスコとはイタリア語で「新鮮な」という意味。フレスコ画は「西洋の壁画に用いる技法」で「石灰と砂を水で練ったものを塗り、それが生乾きのうちに顔料を水で溶いて描いた画」をいう。石灰の層の中に絵の具が染み込んで乾くため堅牢である。土を用いた土性顔料や鉱物を砕いて作った鉱物顔料、動植物から作った顔料で書かれていた。天然顔料以外では人工無機化合物による顔料も用いられる。修復には元の顔料と区別するため水性絵具が使われる。

